ココロがある。コタエがある。
長崎銀行

対談 Special Conversation

長崎銀行頭取
開地 龍太郎 氏 × 長崎総合科学大学教授
ブライアン・バークガフニ 氏

総合力結集し存在感向上へ

今年で創業108年を迎える長崎銀行は、県民からの確かな信用に支えられ本県の経済浮揚に貢献し続けています。今後、九州新幹線長崎ルートの開業を軸に、本県は大きな転換点を迎えます。今回、就任から1年が経過した開地龍太郎頭取が、長崎の歴史家で長崎総合科学大学教授のブライアン・バークガフニ氏と「これまでの長崎・これからの長崎」をテーマに対談。地域貢献や経済活性化、街づくりのビジョンなどについて語り合いました。司会進行は長崎新聞社取締役編集局長・石田謙二。〈企画・制作/長崎新聞社メディアビジネス局〉

長崎総合科学大学教授
ブライアン・バークガフニ

1950年カナダ・ウィニペグ市生まれ。72年来日。73年臨済宗入門得度、82年まで京都の妙心寺専門道場などで禅の修行。同年長崎に移住。92年外国人初の県民表彰。96年長崎総合科学大教授就任。2009年同大環境・建築学部長就任。グラバー園名誉園長。専門は歴史社会学、長崎の国際交流史。

長崎銀行頭取
開地（かいち） 龍太郎（りゅうたろう）

1961年宮崎市生まれ。大分大経卒。85年西日本銀行（現西日本シティ銀行）入行。営業企画部長、総務部長、本店営業部長を経て、2018年6月西日本フィナンシャルホールディングス執行役員、西日本シティ銀行取締役常務執行役員融資統括部・融資部担当を兼務。19年6月、長崎銀行頭取に就任。

コロナ禍の今 銀行の出番

開地氏

石田　開地頭取におかれては就任から一年が経ちました。長崎の印象はいかがですか。

開地　長崎で仕事をすることも住むことも初めてでしたが、まず長崎には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」、それに「明治日本の産業革命遺産」と二つも世界遺産があるのは驚きです。ハウステンボスや五島、壱岐、対馬など離島もあり、観光資源が非常に豊富。新鮮な魚介類や和洋、中華料理が交じった「和華蘭」グルメなど、食の楽しみもたくさんあり素晴らしい街です。

諏訪神社の長崎くんちや冬の長崎ランタンフェスティバルも長崎独特の祭りですね。特に長崎くんちでは長崎銀行の本店がある栄町が今年の踊町で「阿蘭陀漫才」を奉納することになっていました。残念ながら延期になりましたので、来年の楽しみとして取っておきたいと思います。これだけ観光資源が豊富なので、もっとアピールが必要だと感じます。

バークガフニ　長崎の街は江戸時代から江戸幕府の直轄領だった影響もあり、裕福で豊かな暮らしができていたと言われています。だから長崎の方は優しいと言われますが、裏を返せば、あまり積極的ではないという印象も抱かれる。私がいつも思うのは、長崎の良さに長崎市民が関心を持ち、それを生かしていく意識を持つことが鍵だと思います。

石田　外国人の視点でバークガフニさんが、長崎に住む私たちが知らなかった歴史や良さを掘り起こして下さったという印象があります。

バークガフニ　長崎の一番のイメージは「平和」です。原爆による被害から復興し、平和を強く求める県民性が醸成されていますが、私は「もう一つの平和」があると思っています。江戸時代、オランダ、中国、日本の人たちが200年以上にわたり共存共栄をしていました。対立しても話し合い、問題を解決していく知恵が生きています。それが長崎に惹かれる理由です。

さまざまな異文化を日本人が受け入れ、切磋琢磨して独特の文化が生まれた。そのような街は世界のどこを探してもありません。異文化共存という長崎のモデルケースをぜひ発信してほしいです。

石田　長崎銀行の歴史は大正期からと伺っています。

バークガフニ　長崎銀行の本店の建物は古い建物のままで素晴らしい。私は大学で長崎の古い絵はがきに描かれている場所を学生が探訪し、今と昔の風景を比較する講義を受け持っています。その中で、長崎銀行が描かれた絵はがきも題材にしています。銀行の場合、古い建物ほど大事な「顔」になります。深みがあり、長い歴史があることをイメージとして伝えることは、信頼につながります。

開地　長崎銀行は1912（大正元）年の設立です。今年で108年になります。建物の外観は当時のままです。よく本店の前で学生が写真撮影をされているのも、その講義の一環なのですね。観光客も多く訪ねて来られます。私

対談した開地頭取（右）とバークガフニ教授（中央）。左は司会進行の石田編集局長＝2020年4月21日、長崎銀行本店（新型コロナウイルス感染症対策として対談中はマスクを着用しました）

地元愛育てる金融機関に

バークガフニ氏

呈しました。2012年度からは長崎県立図書館への贈呈も行っています。

子ども、保護者向けイベントとして毎年、夏休み期間中に「ながさきサマースクール～お金のがっこう～」も開いています。お金や銀行の役割をクイズ形式で学んだり、窓口体験や1億円の重さの体験を通して、銀行の仕組みやお金の大切さを実感してもらいます。保護者向けにライフプランニングに関する「金融セミナー」もあります。

2020年3月末現在、延べ奨学生数は197人、貸与残高は2254万円になりました。また、1982年度から29年間にわたり約4800冊の図書を長崎市立図書館へ贈った。

県は、20年後には105万人まで減少すると推測されています。一方で、2021年度

そして、毎年8月9日の長崎原爆の日の前に、本部・営業店で清掃ボランティアに取り組んでいます。私も参加し、眼鏡橋周辺を清掃しています。また、「ランタンフェスティバルの皇帝パレード」「ながさきみなとまつり」など、さまざまな地域の祭りに積極的に行員が参加し、これからも地域との繋がりを一層深めていけたらと思っています。

石田　長崎の街の将来への期待を聞かせてください。

開地　人口減少が進む長崎

どもも長崎市民の心の風景の一つとして残していけたらと思います。

石田　歴史ある建物を今も活用されていることも、長崎の街への貢献だと思います。長崎銀行ではほかにもさまざまな分野で、本県のために貢献をされていますね。

開地　まず「長崎銀行奨学育成基金」があります。1973年の設立以来、基本財産を増額し、現在は1億9830万円。その運用利子で奨学金の貸与を実施しています。

鍵になると思います。

バークガフニ　新しいものをつくることと合わせて、私は長崎の古い街の姿も大切にしてもらいたい。私の持論は市民に愛される街が発展するということです。その街に刻まれた独特の物語や歴史、街に住んでいる人たちの日常の暮らしを大切にすること。「長崎が好き」という気持ちが、長崎の良さを発信する原動力になるのではないでしょうか。

石田　確かに住んでいる街に市民が誇りを持たないと、アピールできませんね。

バークガフニ　これまで優秀な人材を都市圏に送り出してきました。しかし、その傾向はそろそろ変わってもいいのではないかと感じています。長崎で就職したい学生は多い一方で、その受け皿が少ない。残りたくても、仕方なく出ていく。地元に残り、新しいことに挑戦する若者への後押しを長崎銀行さんや地元の企業ができたら素晴らしいですね。

開地　地元の銀行として、やる気のある若者をバックアップし、育てていくことも銀行の使命です。今年10月に新銀行「十八親和銀行」が誕生します。一方で、多くのお客さまから、私どもに対する期待も感じています。新銀行の良き競争相手として、長崎のお客さまにより質の高い金融総合サービスを提供することで、長崎県の経済発展に貢献できると思います。

4月から新しくスタートした「新中期計画」のスローガンは「PRESENCE存在感～長崎になくてはならない銀行に～」。長崎銀行が傘下の西日本フィナンシャルホールディングス（FH）にはカード会社、証券会社、リース会社、保険会社など、お客さまの多様なニーズに応えることができる企業があります。グループ力を結集した総合金融サービスを提供し、長崎県での存在感を高めていきたいと思います。

石田　最後に、新型コロナウイルス感染症による経済への影響が懸念されています。長崎銀行として進めている支援があれば教えてください。

開地　銀行は、社会機能の維持に不可欠な金融インフラです。特に長崎の場合は、観光業が主体です。影響が大きく、ホテルや旅館、土産物関連、観光バス、タクシー、食品卸売業などさまざまな業種において影響が及んでいます。4月に全店の支店長に対し、こういう時こそ銀行の出番、地方銀行の使命だと訓示しました。「お客さま起点」という観点で基本動作を徹底し、困っておられる声に真摯に耳を傾け、状況を把握して、親身になって適切にサポートをしていきます。

西日本FH全体で役職員が約6千人います。長崎に1年間の間に1回は家族旅行や社員旅行で訪れるよう、グループ全体でのキャンペーンとして展開し、長崎の観光を盛り上げていきたいとも考えています。

バークガフニ　このコロナ禍は人との絆、普段の日常がいかに大切かということを教えてくれました。一時的な経済的な縮小はあるかもしれませんが、人と人との助け合い、思いやり、協力といった地域の本来の姿が大切になってくると思います。大きな試練ですが、開地頭取がおっしゃったように地元の銀行として、より中心的な役割を果たしてほしいと期待しています。

大正期の絵はがきに見る酒屋町（現在の栄町）から。左の建物は現存する長崎銀行本店の建物（ブライアン・バークガフニ氏所蔵）